

國民學校と幼稚園保育の實際 (二)

倉 橋 惣 三

第三、國民學校就學前必

須の用意

上述、第一講と第二講とは、國民學校と幼稚園との本旨及び方法上の連續に就てあつた。そして、その連續が如何に一貫し、如何に流通せるかを見たのであつた。そこで從來往々にして考へられた、學校は學校、幼稚園は幼稚園といった風の、切り離れた考へ方は極めて不合理のこゝこになる。素より、幼稚園は幼稚園、學校は學校であつて、別の施設ではあるが、幼稚園保育終了者は皆國民學校へ入學するのであるから、幼稚園として、その關係を考へずにはゐられない。幼稚園が義務制でない限り、國民學校低學年が、必ずしも幼稚園を前提してゐないにしても、それは制度上からのこゝこで、幼稚園としては、學校に進むものこゝこいふこゝこを、絶えず考へずにはゐられない。幼稚園を國民學校の豫備門であるとするは正常でないかも知れない。し

かし、折角幼稚園の保育を受けたこゝこが、國民學校のヨイコたりツヨイコたるに極めて好都合なるべきは、當然でないければならない。

殊に、國民學校が昔の小學校であるならば、その偏知的傾向に對して、幼稚園がその豫備門たるこゝこは、極めて迷惑たるを免れない點もあつたかも知れないが、今日の國民學校低學年は、大に面目を異にして居り、従つて、それが、假りに豫備的要求を幼稚園にするこゝこしても、決して無理は起らない風になつてゐる。これらのこゝこは、前講に於て、おのづから觸れた處である。

これを、もう一度逆の方向から言つて見る。國民學校は學校教育としてはそこに初發するものであるが、その就學前に既に長い幼児生活期を経過してゐる。その生活期が、國民學校の教育方針に一致してゐるさまで強くいはないこゝこして、同じ方向に向つてゐるこゝこは、その出發と進展とに大きな關係をもつこゝこ言を俟たない。若しその幼児期生活が不適正であつたら、國民學校は出發に多大の困難を感

するであらうし、甚だつまらない負擔を荷はさせられることになる。そして、そういふことが世に極めて稀でない。國民學校は病院でもなく、矯正院でもない。六歳までの適正な發達を遂げたものを受け取るころである。少くも、そうあり得るころによつて國民學校はその教育効果を容易に擧げ得るのである。

勿論、現實の問題としては、そんな理想的なことを國民學校は考へてはゐられないが、何しろ長い就學前を、國民學校から見て成るべくよく育てられてゐたいことに相違ない。而して、それは、就學前に課せられた義務でもあるのである。

かう考へて來て、然らば、その必須の用意内容はさういふことにならうか。こまかに數へ立てればいろいろさまざまの點が、それらの理由に於て擧げられるであらうが、幼児期保育の特質に基いて、最も主要なる三方面がある。健康、生活々動、躰の三つである。

一 健康

健康の重要は更めて説くまでもないが、國民練成といふ國民學校の大任務に於て、健康に從來以上の力を用ふることは、種々の實際に於て顯著である。先づ國民學校教育實施上の留意事項として健全ナル心身ノ育成ニカムベシ（施行規則總則第一條）を強調されてゐるのを初めとして、職制

の中に特に新たに養護訓導を設けたる如きは、如何に、國民體位向上の爲に、國民學校の機能を發輝させようとしてゐるか、強くあらはれてゐる。

更に體練科に重きを置いて、強靱ナル體力ト旺盛ナル精神力トが國力發展ノ基礎ニシテ特ニ國防ニ必要ナル所以ヲ自覺セシムベシといふ國家的立場からの、健康の尊重を明示してゐる。而して其の健康教育は就學と共に初まるものではない。

健康の重要は誰れも認めながら、教育となるに往々にして之れを無視したり、甚だしきは之れを犠牲にしたりすることが、從來の弊であつた。幼稚園さへもが、健康の爲に危まれたりした。又、實際に於て随分不健康なことが敢てせられたりした。少くも、他のあれこれの目的を主として、健康に對する積極的考慮なきは頓ち行はれなかつたりした。斯くて、幼稚園が國民の就學前を護り育てるものといへやうか。

ところで、幼稚園が就學前の健康に對して責任的に實行しなければならぬことは、概括して三項となる。(一)發達助成、(二)鍛練、(三)個々缺陷の早期留意、之れである。

(一)發達助成とは、幼兒の自然の發達に對して、之れを妨げることなく、之れに適切有效なる各種生活條件を與へて、その、よりよき發達を助成することである。

これが爲めに、榮養、運動、休息、睡眠等の一般的考慮が充分に行はれると共に、幼稚園の設備そのもの、健康條件が細心に注意せられなければならぬ。幼稚園を完全に理想的にするといふことは容易でないが、之れ等健康のための條件に就ては、一毫もその不備不注意を許せない。

更に、幼児期傳染病に對する注意は最も大切であつて、この爲に警戒豫防せらるべき考慮に就ては、家庭もよく連絡して、極めて周到なる注意を要する。家庭と連絡の必要は、單に此の點に止まらず、健康保育の全面に亙ることであるが、他の點は、多少それ／＼の分擔があるとして、傳染病の點こそは、一方的には解決出来ない。

殊に問題となるのは、保育項目のそれ／＼に於て、識らず／＼過度の緊張を與へることの危険である。勿論、普通としては幼児生活の自然の調整に基いて、そんなに心配すべきことはない筈のものであるが、古い時代に行はれた細緻巧妙を貴んだ所謂細工手技なきにあつてはその弊なしとしなかつた。今日に於ては大にその弊が無くなつてゐるが、若し成績本位的指導が強行はれたりする時、幼児の過勞を來さないとも限らない。

わけても、保育項目が課業的に厳しく取扱はれて、生活の自發的な愉悅性を失はれたりすることがあると、健康の發達の爲に頗る有害といふことになる。つまり、幼稚園

での健康保育は、生理的の問題であると共に、心理的問題だといふことである。國民學校の教育本旨に於て、最も力を入れてゐる「心身一體」さいふこは、幼児期に於ては一層本質的なことになるのであり、「教授、訓練、養護、分離、避くべし」さいふこも、幼稚園保育の必然たり、必須たることである。

(二) 鍛練。次に、發達の助成に止まらずして何等かの鍛練を加ふることも、健康保育の通則である。國民學校の體操科要旨では、「身體ヲ鍛練シ精神ヲ練磨シテ濶達剛健ナル心身ヲ育成シ」とある。これをこのまゝ幼稚園に適用すべきではないが、強度は加減しても、鍛練と練磨とは、現代日本教育に缺いでならぬことである。

たゞへば幼稚園遊戯に就て見る。その保育上の意義はいろいろであり、或る種類のものでは、優美柔軟の動作を主として、藝術的巧緻を以て専ら情操の教育に資せやうとするものもある。之れ又、たしかに、遊戯の一つの重要意義である。しかも、今日に於ては、美的といふよりも強健を主とし、繊細な末梢運動よりも基本筋肉の大まかな運動を主とし、舞踊的よりも競技的を主とし、藝術的巧妙性のものよりも普通の遊戯のまゝを取り入れた原始性のものを主とし、さいふこの具合に、男兒も女兒も、大に力を籠めて元氣よく運動させることをつぎめてゐる。これらも一つの鍛

練である。

但し、鍛練を重んずるこいつても、要するに未だ幼弱な身體の所有者である。度を過ごして無理をさせることは、深く慎まなければならぬ。鍛練主義なごの名に於て、この誤りに陥るもの、特に近來尠くないのは懸念にたえない。この點に於ては教育目的としての鍛練を、幼兒身體に對する科學性との正しき調和が守られなければならぬ。又、鍛練の鍛練として行ふのみでなく、幼稚園生活の全體を通じて、單なる發達助成以上の積極性を加へゆくことも必要である。

(三) 個々缺陷の早期留意。以上の二項も各幼兒の個々に就て、按配加減せられることが必要である。わけても、個々の體質や、生理機能や、又感育等に就ても、その缺陷を速かに發見し、之れに適切な注意を施すことは、幼稚園の健康保育として、何より大切な任務である。

この點に就ては個々の幼兒の性格的、心理機能的特色を發見し、その缺陷を特殊傾向に對して注意を加ふることに同じく、或はそれ以上に大切なことといへる。これら缺陷は家庭の往々にして見落すところであつて、これを正しく發見し得る事こそ、幼稚園の専門的可能事であり、それが出來なくて、専門施設たる何んの誇りも存在の意義もない。

これを發見したら、之れを矯正することは勿論である。

しかも、齒科治療の如きに於ては簡單に行はれるけれども、一般としては、必ずしも、幼稚園だけで、殊に、その保育期間に於て、矯正治療を完成し得るに限らない。それでも仕方ないが、精確なる早期發見の報告が國民學校に傳達繼承せられる時、如何に有用なることであらう。幼稚園は國民就學前保育機關として、此の任務を充分履行することを、最少限度にして、最大なる責任をしなければならぬ。而して此の爲に、幼稚園の身體検査の現状の甚だ足らざるものがあり、又保姆のその方面の教養の必ずしも充分ならざるものあるを否定し得ないであらう。

二 生活々動

國民學校の教育は、普通教育である限り、各種能力の發達を重んじてはゐるが、從來の小學校が稍々もすれば、そこに止まつたのに對して、國民學校は生活の綜合能力をもいふべきものを尊重してゐる。知能を知能として所有することよりも、知能の根本力をもつことを貴しとする。これを他の言葉——殊に幼兒期にも適用せられる言葉を以ていへば、生活々動力の教育である。

幼稚園が小學校に準備するとして、從來謂はれたことは、知能の内容の先きまわりの供與であつた。それが小學校のためにも眞に役立つことなく、幼稚園のためには大に有害

であるとして非難せられてゐた。しかも、常時の小學校低學年は、それ自身知能内容の教育を主として居り、それに準備するにすれば、それ以外の何ものでもあり得なかつた。ところが、國民學校殊にその低學年で知能の個々内容よりも、生活々動の根本教育を重んじ來つた以上、それは、元來が幼稚園教育の本旨であり、その本旨を以て彼の本旨に繼承せられることゝなつたのである。

生活々動の教育は、幼稚園に於ては、自由遊戯の活潑なる發動性をもこゝして、あらゆる保育の場合に於て主眼とされてゐるところである。何を知つてゐるかよりも、知らんとする心。如何に巧に出来るかよりも、作らんとする心。描かんとする心。歌はんとする心。否、こゝする心よりも、作り、描き、歌ひ、知らんこゝせず、にふられぬ心。それこそ、幼稚園が幼児に求むるところであり、養ひ強めんとしてゐる點である。而して、斯ういふ生活々動の強い子こそ、國民學校低學年へ進むに最もよく用意せられてゐる子といへやう。

たゞ、生活々動は強く旺んであることのみでなく、年齢に應じて、系統立てられてゐなければならぬ。それなくしては、たゞの元氣である。そこで、幼稚園は、たゞ我子の元氣を誇る家庭と異つて、生活の秩序と系統とに於て、正しく活動することゝを養はねければならぬ。目的を立て、

計畫を整へ、研究し、工夫し、努力し、更に、自ら批判！自ら試験をこゝした風の、活動體系(こゝいふも大げさである)が、習慣づけられたのである。

たゞへばたゞ興味に豊かだこゝいふばかりでなく、如何にしてその興味を自ら満足せしめ得るかを知つてゐる興味力でなければならぬこゝいつてもいふ。之れは、興味性の教育といふ場合、缺くべからざる要素であるが、他の方面に於てもいへる。即ち、生活々動の出發と途とに就て教養せられるのである。

自發的興味が強いとして、それを他の力で満足させられて平氣であるならば、正しい興味生活々動とはいへない。物に對して興味を出發させると共に、自己の生活を興味の對象とするのでなければ、訓練せられた生活々動とはいへないのである。

(三へつとく)